

# 宮城県若年者自殺対策調査研究等事業

## ～児童生徒のこころと 行動に関する調査結果より～

### 精神保健福祉センター

技術次長(総括担当兼班長) 大場 ゆかり

技術次長 小原 聡子

生活支援班 技師 浅野 直子

企画班 技術次長兼企画員(班長) 松野 あやえ

○ 技術主査 吉田 愛

### 中央児童相談所

技術主幹(班長) 横野 富美子(前精神保健福祉センター)

# はじめに

子ども時代のメンタルヘルスの問題は、一生にわたる「こころの健康」に密接に関連し、この年代への取り組みは、将来の自殺予防の上でも重要と考える。

思春期の子ども達が示す攻撃的な行動や反社会的な行動は、自殺に関連した行動や心理状態に密接に関連すると言われていることに着目し、教育現場での児童生徒の実態及び学校での保護因子的関わりについて調査した。

本発表では、調査結果から明らかになった学校の機能を活かした支援の有効性及び地域との連携の重要性等について報告する。

# 若年者自殺対策調査究事業の概要

(1) 実施年度：平成21年度～24年度

(2) 内 容

① 研究協議会（平成21年度～23年度）

メンバー：学識経験者、教育・保健福祉関係者計20名

検討内容：課題の共有・明確化、調査票の検討、  
調査結果の分析

② 児童生徒のこころと行動に関する調査（平成22年度）

③ シンポジウム

思春期のこころの健康をテーマに年1回開催

平成21年度「早期小児期からの自殺行動の予防を考える」

平成22年度「思春期のこころと行動～気づき・つながり・育てる～」

平成23年度「震災と若者のこころの健康～思春期をのりこえる為に」

④ 所内検討会

# 「児童生徒のこころと行動に関する調査」の概要

(1) 対象者 (県内国公立・私立学校 ※政令市除く)

小学校162校・中学校157校・高校90校の各学年から  
1クラス抽出、その担任教師 1,065人

(2) 調査対象学年

小学校5～6年生, 中学校1～3年生, 高校1～3年生

(3) 調査方法: 自記式調査用紙郵送による調査

(4) 調査内容: ①担任教師が「気になる」「問題」と感じる児童生徒数

②問題(リスク)行動に該当する児童生徒数

③保護因子的関わりについて教育現場の現状

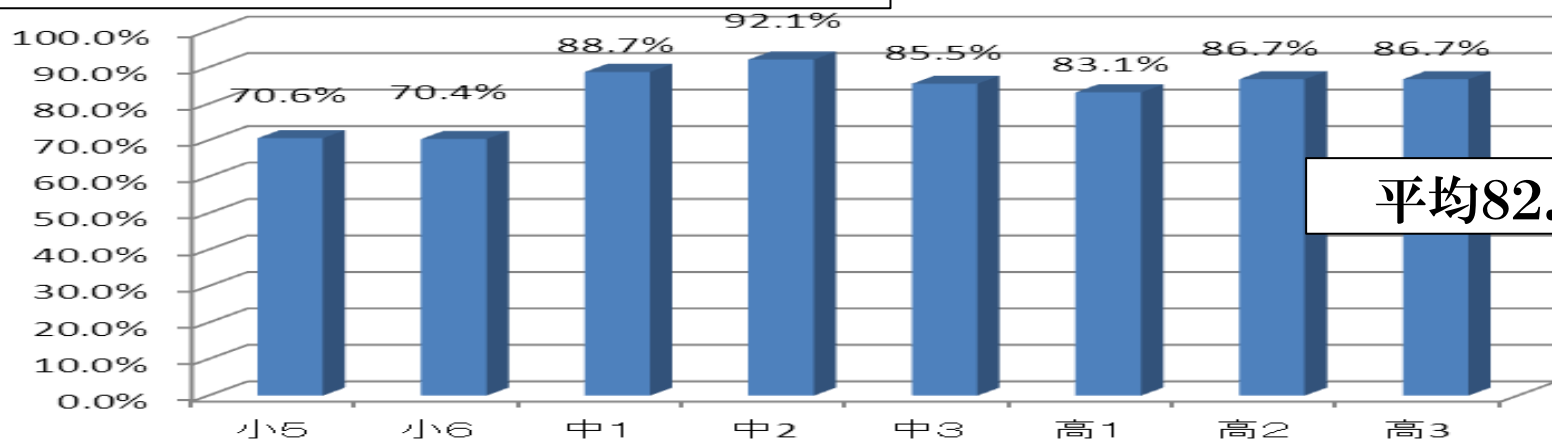
(5) 調査期間: 平成22年12月～平成23年1月末

(6) 回収率: 89.0% (回答教師数948人)

# 調査内容①

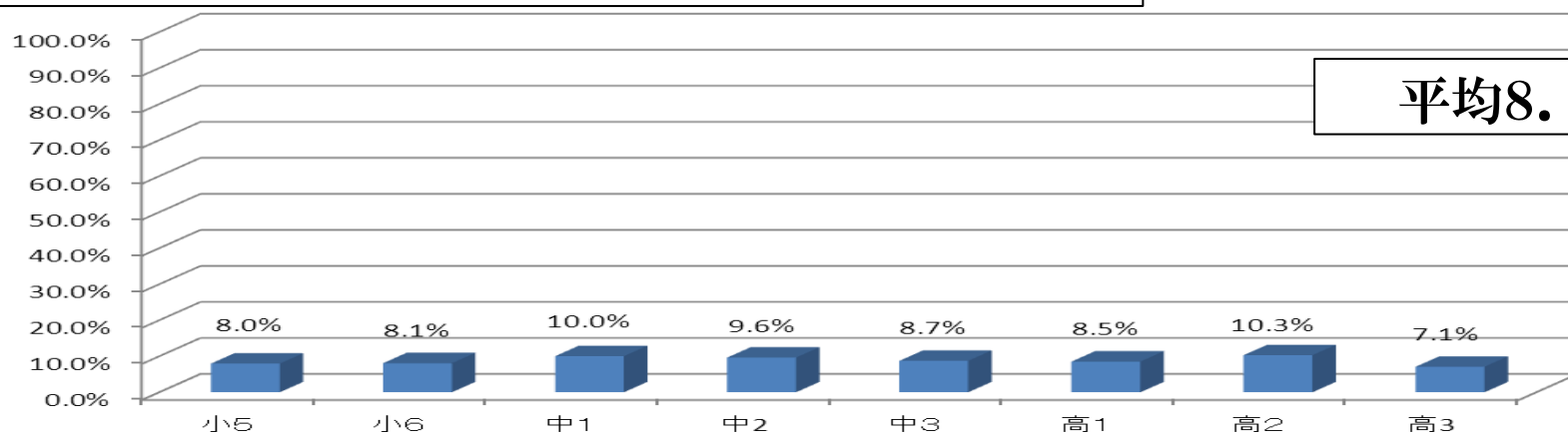
## 担任教師が「気になる」「問題」と感じる児童生徒について

「いる」と回答した担任教師の学年別割合



平均82.0%

「気になる」「問題」と感じる児童生徒数の学年別割合



平均8.8%

## 調査内容②

### 問題(リスク)行動がみられる児童生徒数の調査項目について

#### 「心に負担がかかった時の行動」

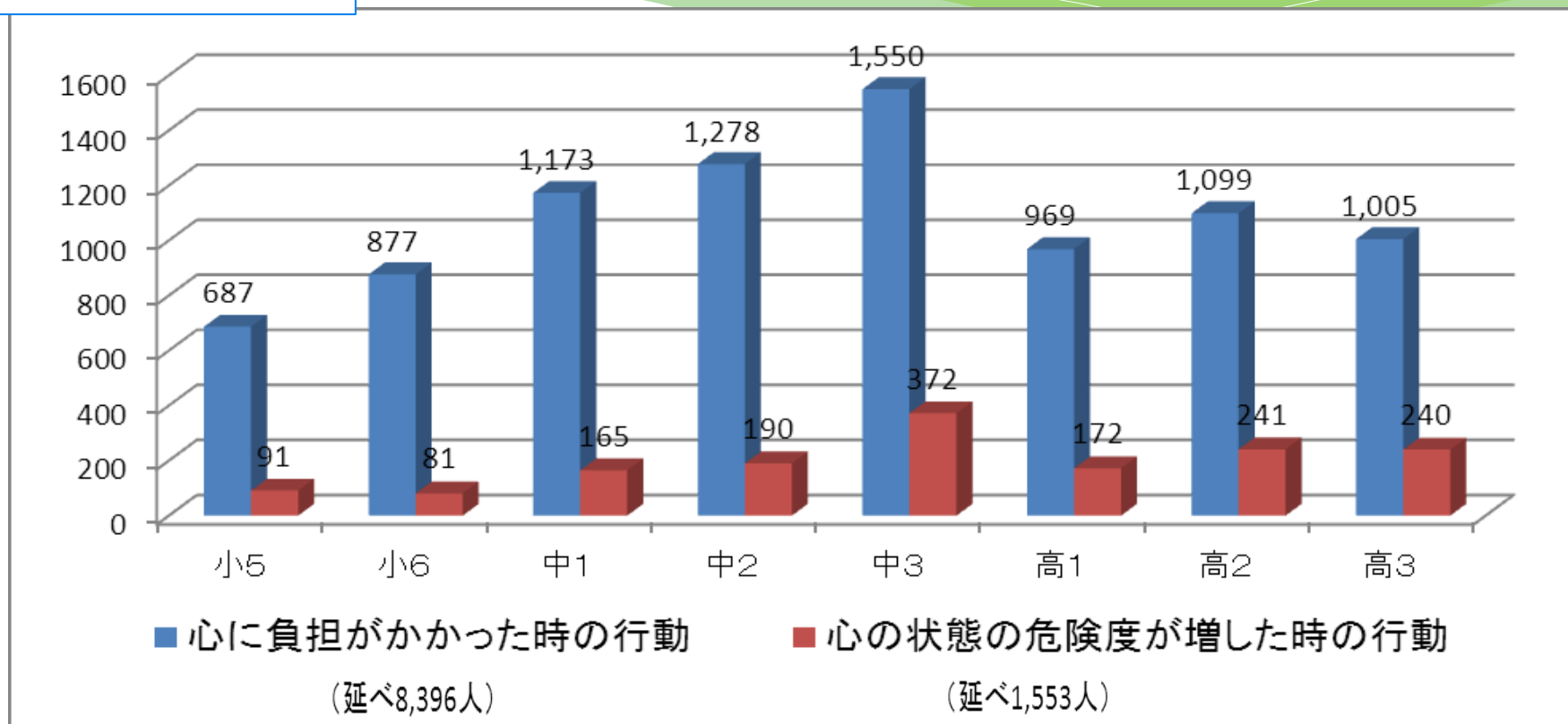
- ・元気がなく疲れているようにみえる
- ・暗い表情等憂うつそうにしている
- ・身体症状をよく訴える
- ・過呼吸を起こす
- ・いつも眠そうにしている
- ・急にやせてきた、逆に急に太ってきた
- ・イライラが多く、かっとなりやすい
- ・落ち着きがない
- ・集中力がない
- ・ぼーっとしていることが増えた
- ・保健室を頻繁に利用する
- ・遅刻や欠席が多い,出席率が悪い
- ・不登校または不登校傾向がある
- ・家に帰りがらない
- ・周りとの関係を持とうとしない
- ・急に友達とのつきあいが減った等孤立している
- ・教育費の未払い等経済的な問題がある
- ・暴力やネグレクト等虐待が疑われる

#### 「心の状態の危険度が増した時の行動」

- ・自転車,バイク,自動車等無謀運転やしばしば事故を起こしてしまう
- ・たびたびけんかをする
- ・身の危険を顧みない行為を繰り返す,ケガが多い
- ・家庭内暴力がある
- ・他の児童生徒に対して暴力をふるう
- ・教師に対して暴力をふるう
- ・学校内の施設や物を壊したりする
- ・性的逸脱行動がある
- ・授業をさぼる
- ・夜遅くまで遊ぶ
- ・触法行為等がある
- ・無断外泊や家に帰らず遊び歩くことが多い
- ・急に、髪,化粧,服装等が派手になった
- ・喫煙をする
- ・飲酒をする
- ・薬物の乱用がある
- ・リストカットをしたことがある
- ・「死にたい」と口にすることがある

# 「心に負担がかかった時の行動」と「心の状態の危険度が増した時の行動」に該当する児童生徒の状況

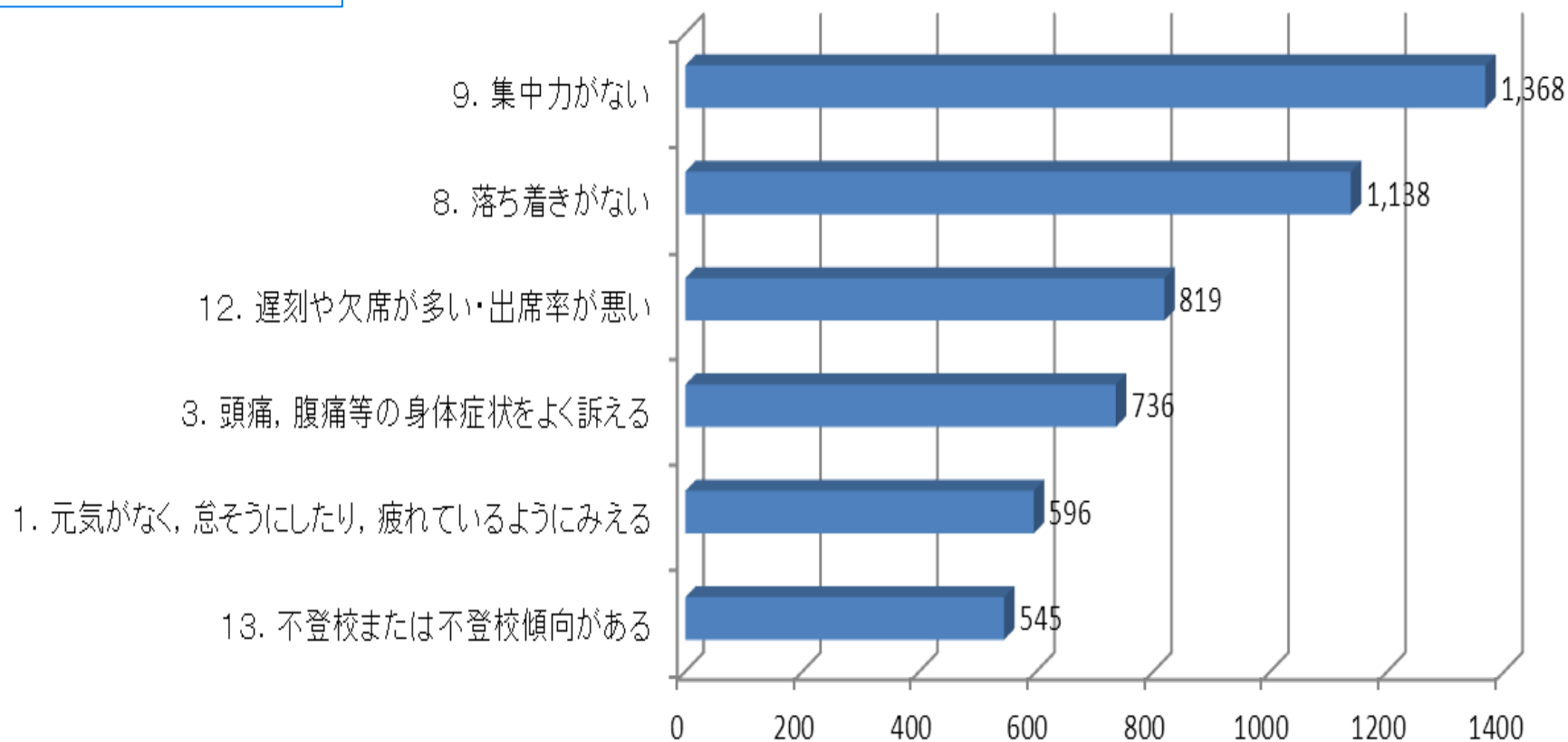
## 児童生徒延人数



- \* 中学生で心に負担や問題を抱えた児童生徒が多くなり、高校生になると少なくなる傾向が見られた。

# 心に負担がかかった時の行動

全体：上位6項目

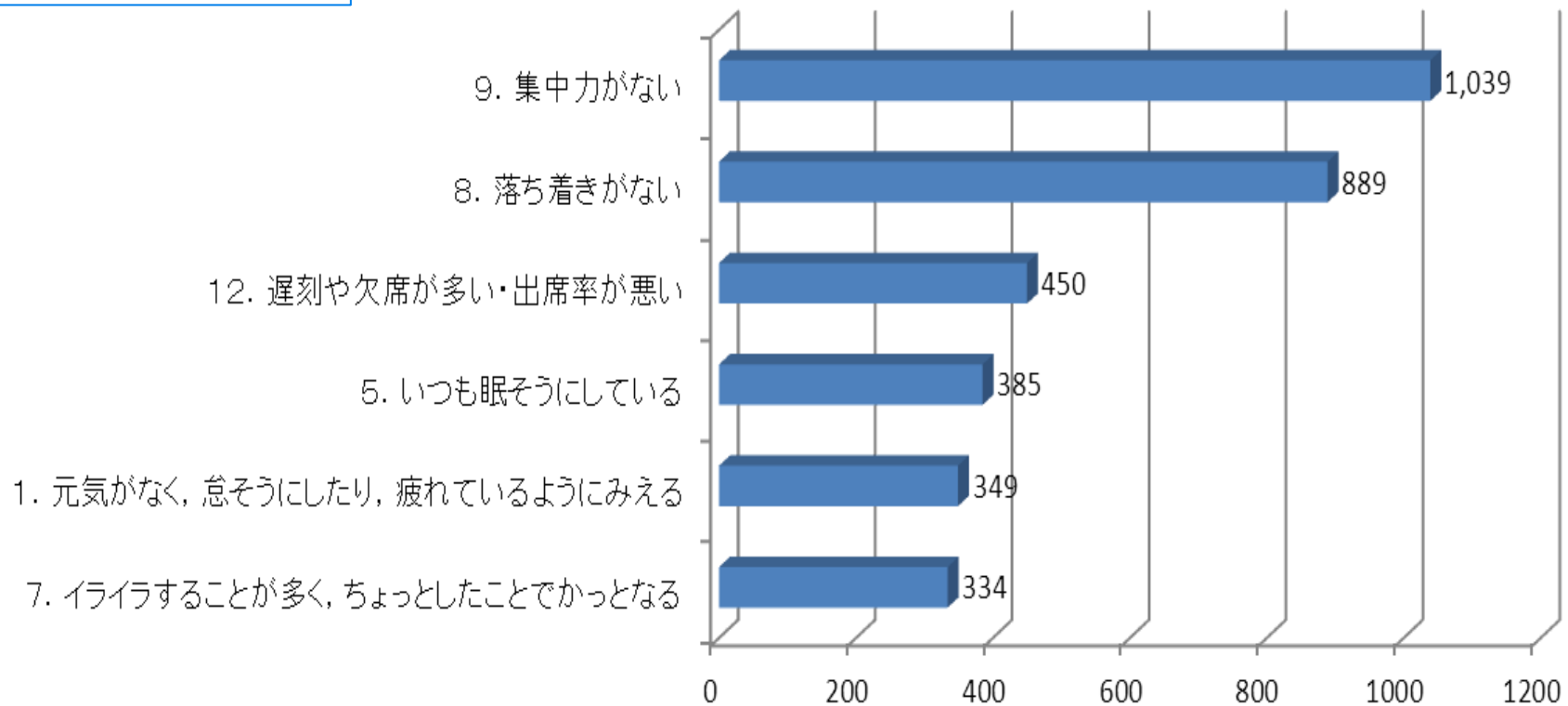


- \* 最多は「集中力がない」で、次いで「落ち着きがない」「遅刻や欠席が多い・出席率が悪い」「頭痛, 腹痛等の身体症状をよく訴える」が続く。



# 心に負担がかかった時の行動

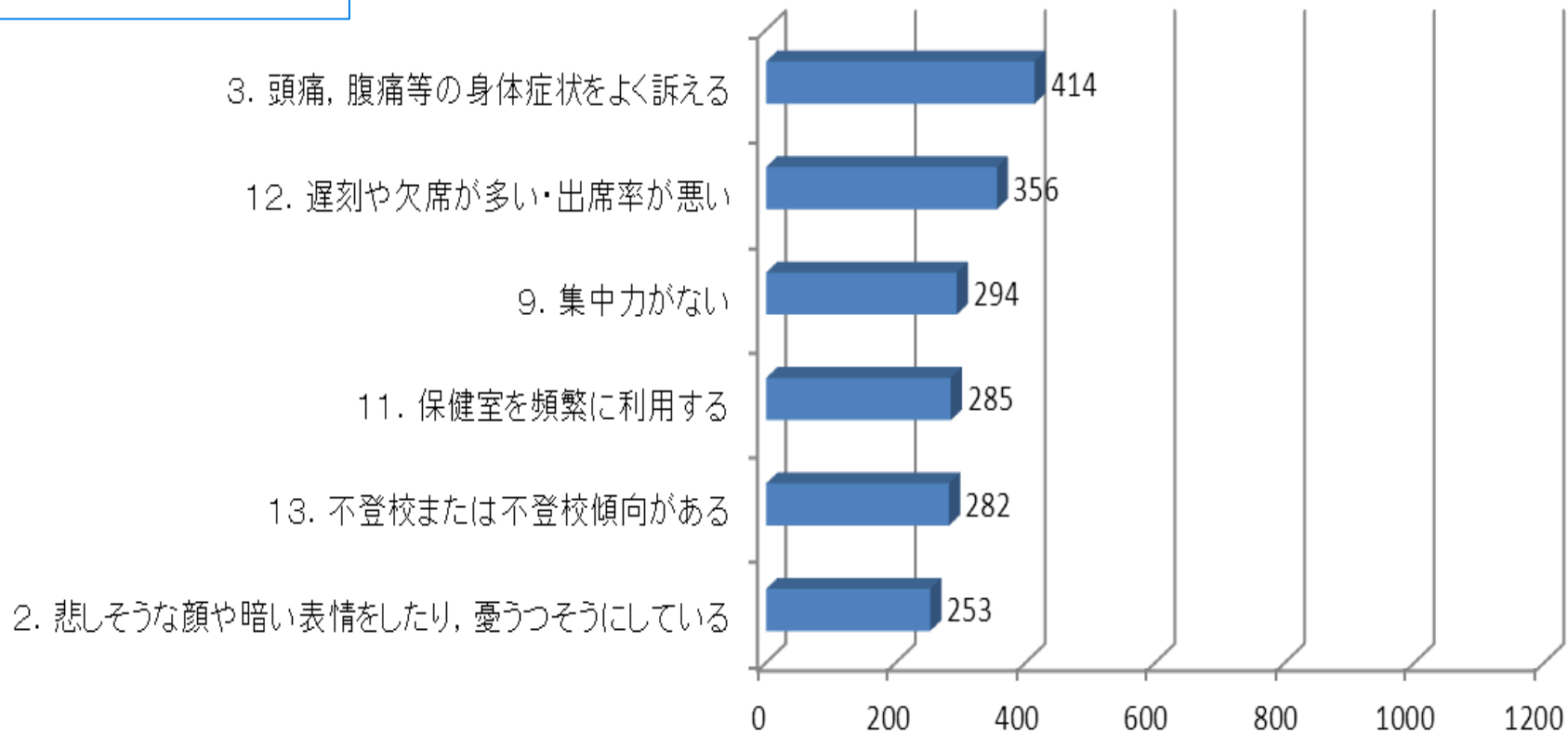
## 男子：上位6項目



- \* 全学年を通して「集中力がない」「落ち着きがない」が高く、合わせると男子全体の38.2%を占める。次いで「遅刻や欠席が多い・出席率が悪い」「いつも眠そうにしている」が続く。

# 心に負担がかかった時の行動

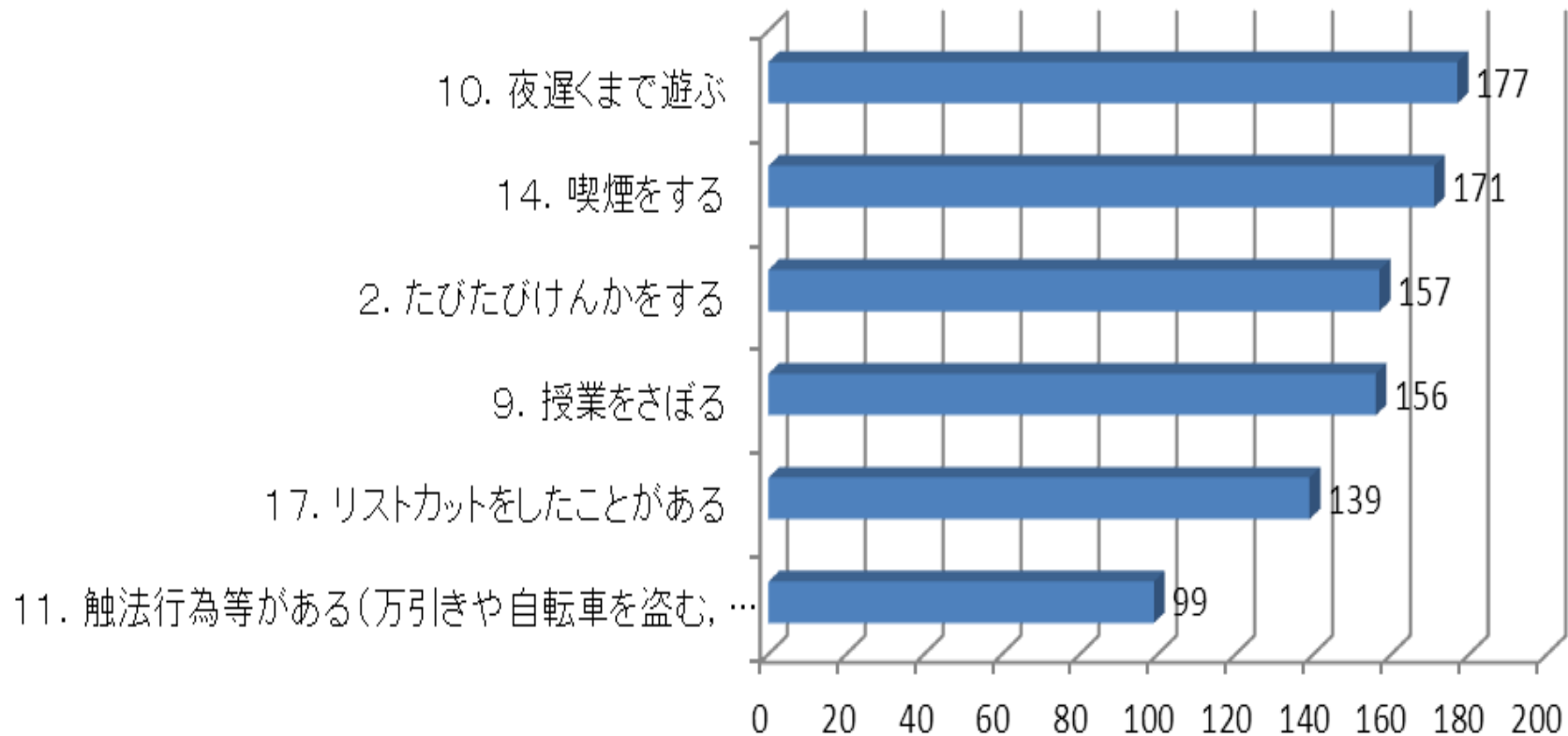
## 女子：上位6項目



- \* 「頭痛, 腹痛等の身体症状をよく訴える」「遅刻や欠席が多い・出席率が悪い」「集中力がない」「保健室を頻繁に利用する」と続き、男子ほど各項目に差はなかった。

# 心の状態の危険度が増した時の行動

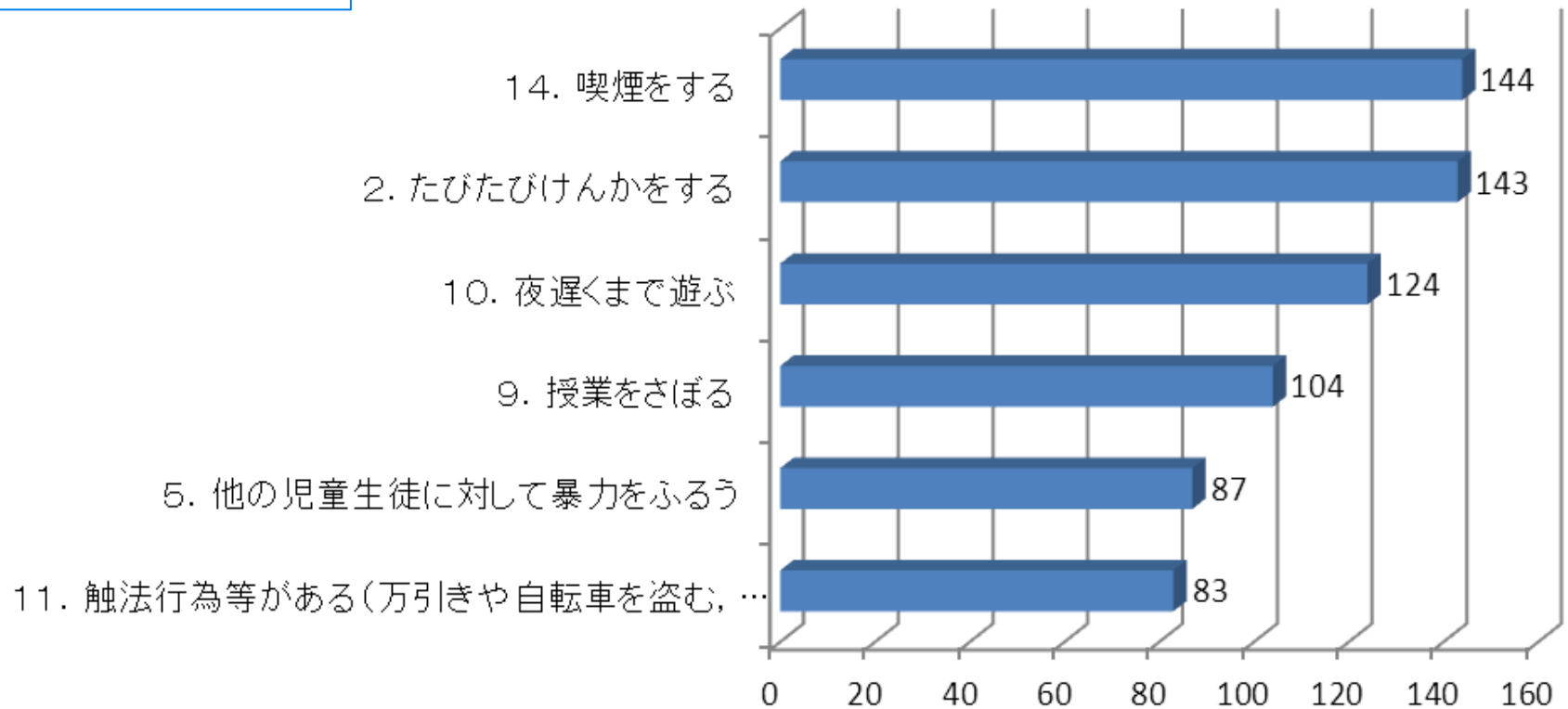
全体：上位6項目



\* 「夜遅くまで遊ぶ」「喫煙をする」「たびたびけんかをする」「授業をさぼる」の順であった。

# 心の状態の危険度が増した時の行動

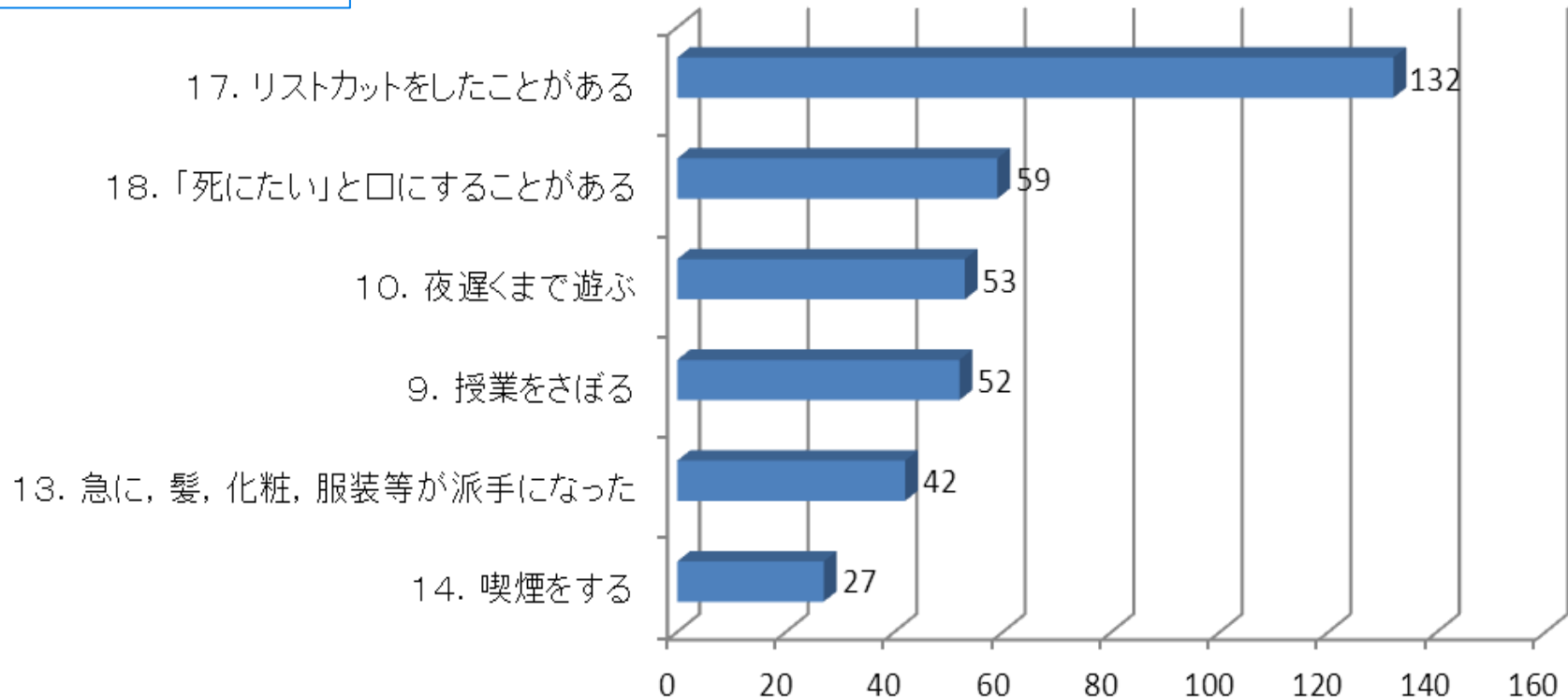
## 男子：上位6項目



- \* 「喫煙をする」「たびたびけんかをする」が並んで多く、「夜遅くまで遊ぶ」「授業をさぼる」が続く。全体に占める男子の割合が大きいこともあり、全体の傾向とほぼ同じである。

# 心の状態の危険度が増した時の行動

## 女子：上位6項目



- \* 最多が「リストカットをしたことがある」で女子全体の27.1%を占める。次いで「死にたいと口にすることがある」「夜遅くまで遊ぶ」「授業をさぼる」が続く。自傷行為や希死念慮に関する項目が4割近くを占めていた。

## 調査内容③

# 学校の保護因子的関わりの調査項目について

### 「気になる子や問題のある子への対応」

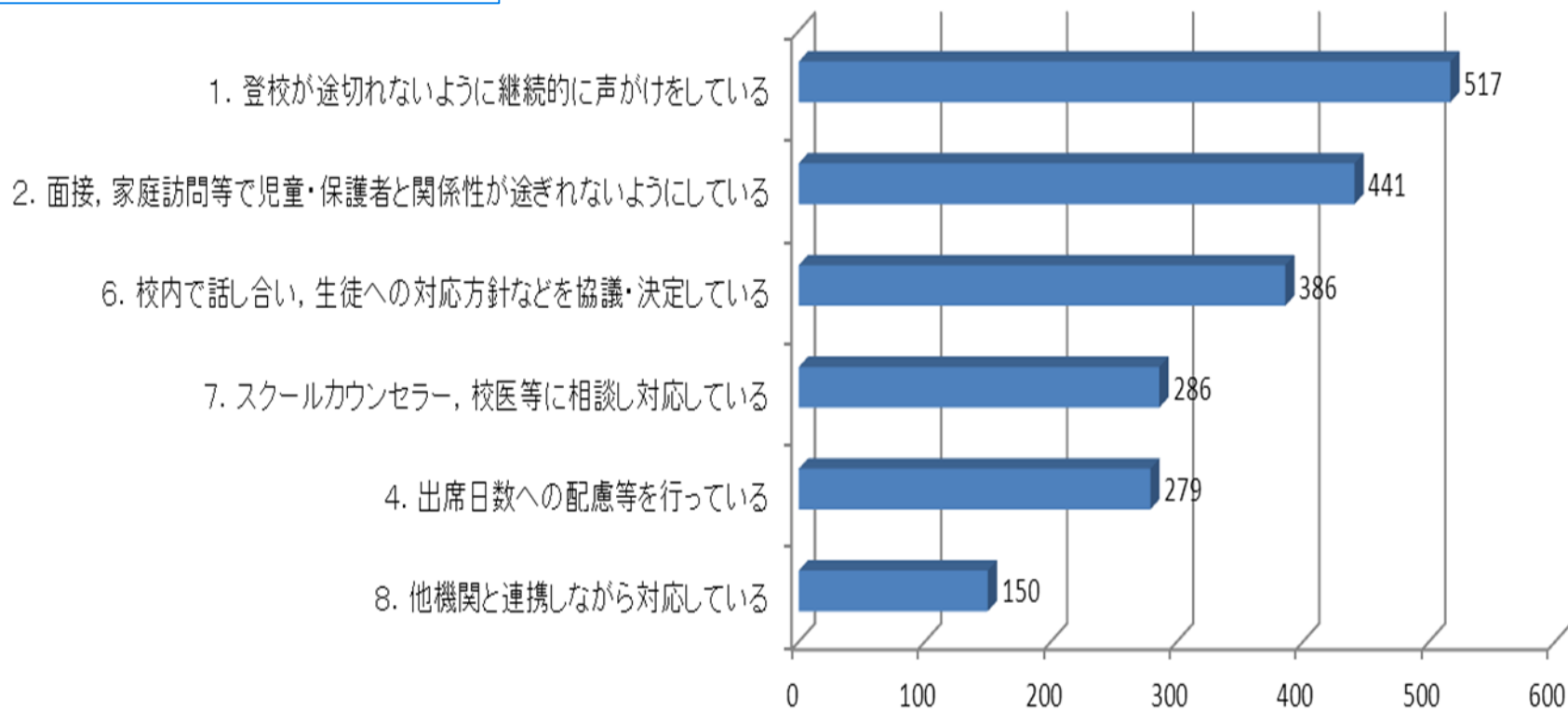
- ・学校への登校が途切れないように継続的に声かけをしている
- ・面接, 家庭訪問等でコミュニケーションをとり, 児童生徒や保護者との関係性が途切れないようにしている
- ・補習事業など学習面での配慮を行っている
- ・出席日数への配慮等を行っている
- ・出身校と連絡を取り, 必要な情報を把握している
- ・校内で話し合いを持ち, 必要な情報を把握している
- ・校内で話し合いを持ち, 生徒への統一した対応方針などを協議・決定している
- ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー, 校医等に相談しながら対応している
- ・他機関と連携しながら対応している

### 「実際の対応の中で心がけてきたこと・難しいと感じること」

- ・子どもの気持ちを知ろうとする努力をすること
- ・その子どもが本来持っている強さや良さに着目し, それを伸ばす関わりをすること
- ・なるべく孤立しないように働きかけること
- ・受容され, 見守られている感覚がもてるようにすること
- ・学校が帰ってきてよい場所, 子どもにとっての居場所であることを保証し, 伝えること
- ・問題行動の背景にある要因を考慮しながら, 関わること
- ・学習面だけでなく, 子どもが学校に来やすくなるような配慮や働きかけをすること
- ・成長過程を踏まえた上で, 今どのように関わるべきかを意識すること
- ・学校のみならず, 家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをすること

# 気になる子や問題のある子に対し 「十分に実施」と回答した対応

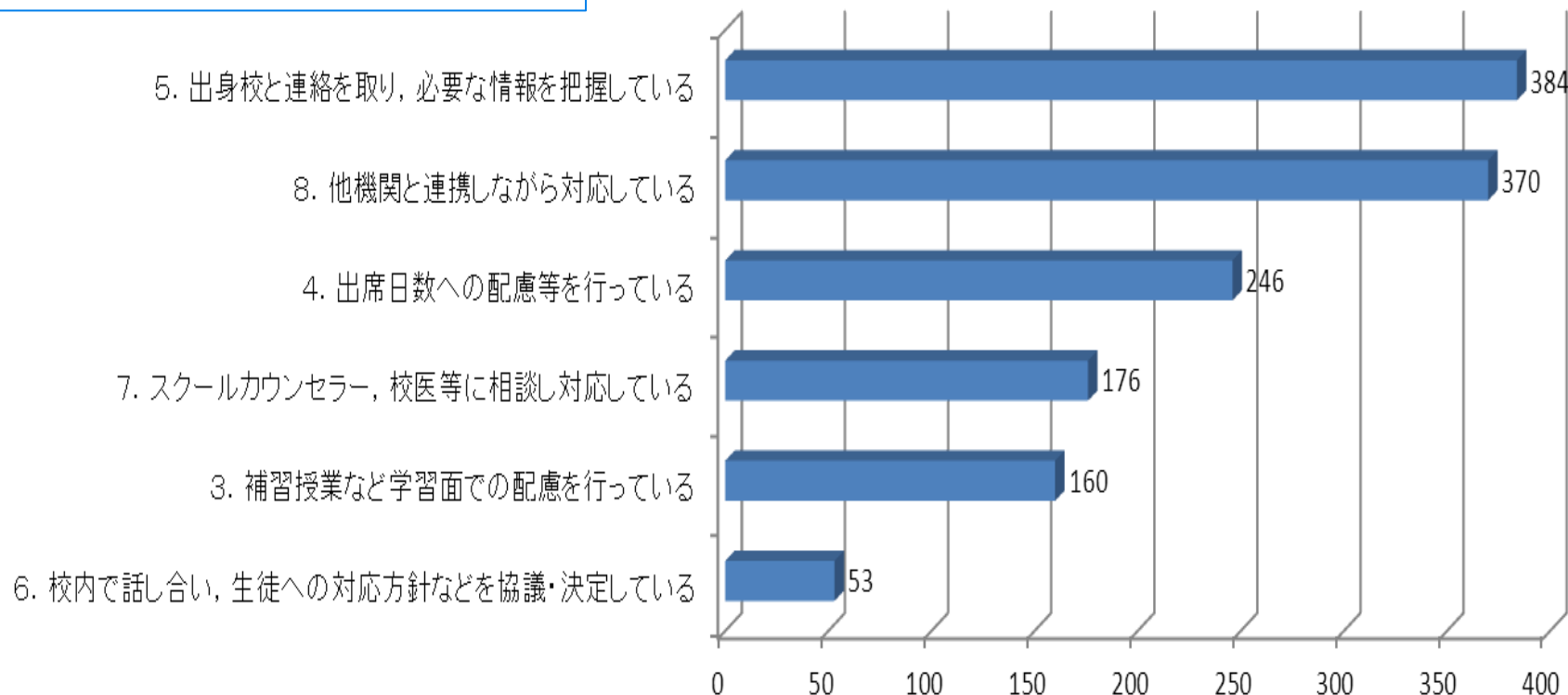
## 十分に実施：上位6項目



- \* 最多が「登校が途切れないように継続的に声がけをしている」で次いで「面接・家庭訪問等で児童・保護者と関係性が途切れないようにしている」が続く。これらの項目は、全学年に共通し高い項目であった。

# 気になる子や問題のある子に対し 「実施していない」と回答した対応

## 実施していない：上位6項目

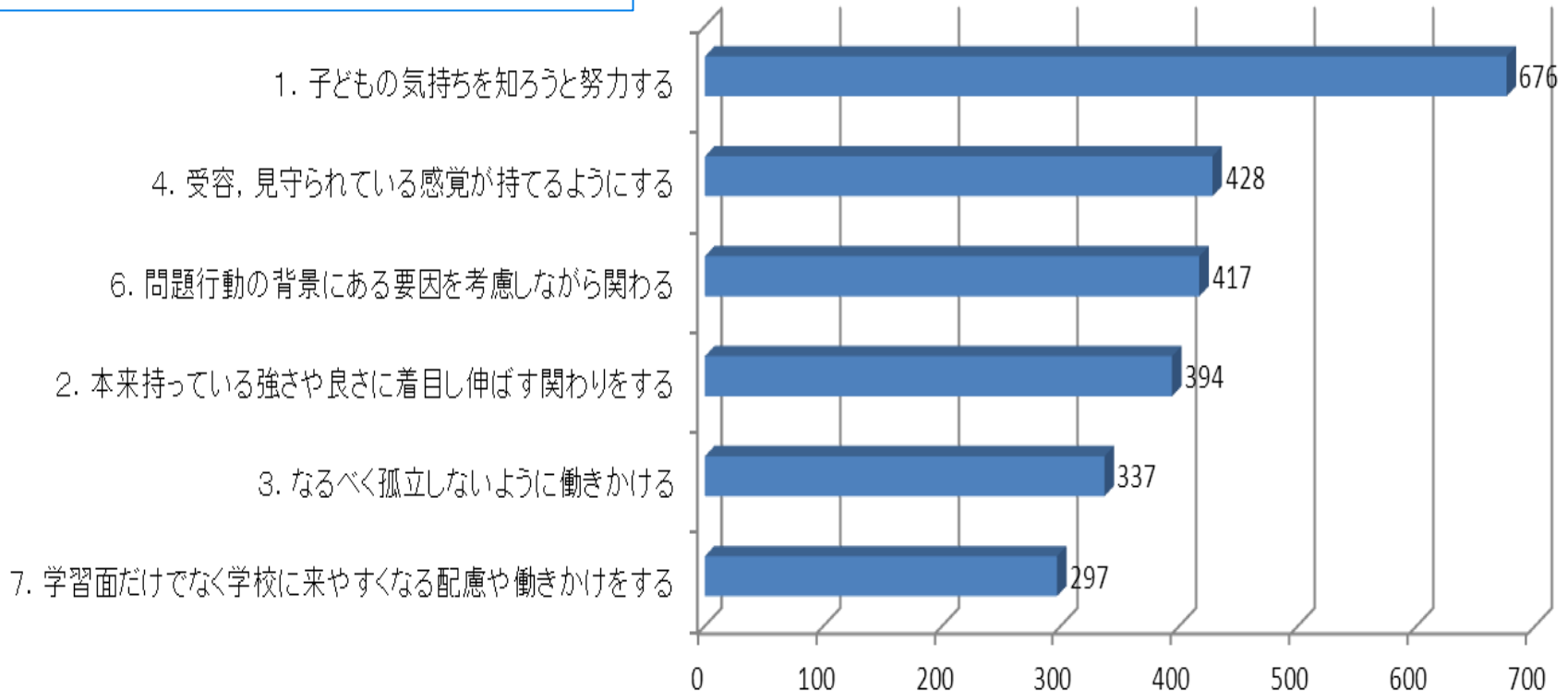


\* 「出身校と連絡を取り、必要な情報を把握している」「他機関と連携しながら対応している」が並んで高く、この項目は全学年に共通し高い項目であった。



# 実際の対応の中で心がけてきたこと

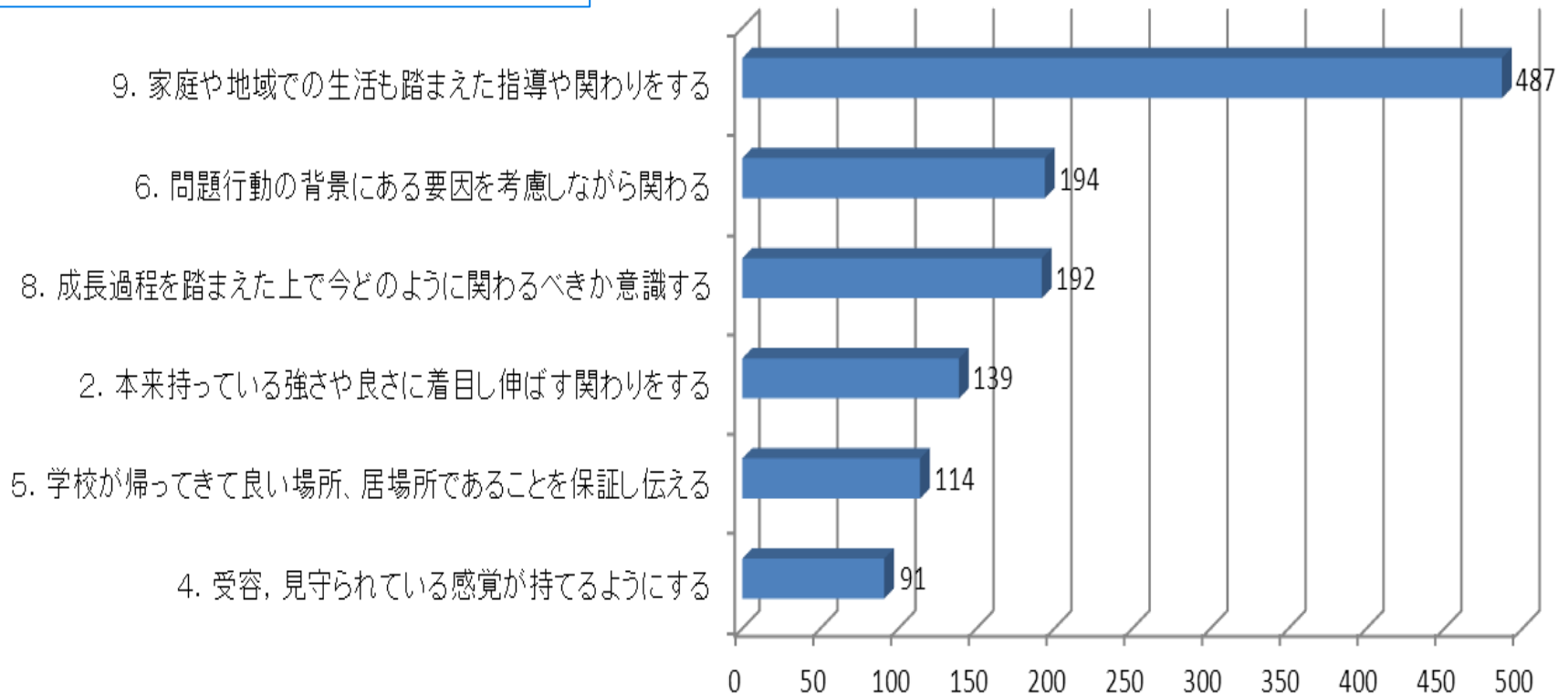
## 心がけてきたこと：上位6項目



- \* 「子どもの気持ちを知ろうと努力する」が高く、次いで「受容, 見守られている感覚が持てるようにする」「問題行動の背景になる要因を考慮しながら関わる」が続く。

# 実際の対応の中で難しいと感じること

## 難しいと感じること：上位6項目



- \* 「家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをする」が全学年で高く、次いで「問題行動や背景にある要因を考慮しながら関わる」「成長過程を踏まえた上で、今どのように関わるべきか意識する」が続く。

# 調査結果

- \*「心の状態の危険度が増した時に表す行動」の該当児童は、「心に負担がかかった時に表す行動」の該当児童の2割弱で、多くは、発達過程の中で攻撃性や問題行動が収まってくる。
- \*男子は他者や周囲に向かう攻撃的な行動、女子は攻撃が自身に向かう行動をとる。攻撃性の表し方、向け方に男女の違いがある。
- \*中学生で、問題(リスク)行動が増加し、高校生になると減少する。
- \*学校で実施されている・心がけている項目は、学校が本来担っている役割、学校主体や学校単独で取り組める内容が多い。
- \*担任教師が実施していない項目は、学校のみでは取り組めない内容。難しいと感じている項目は、出身校や他機関、家庭や地域等との連携であった。

# 考察

- ①発達過程の中で攻撃性や問題行動が収まってくることが予測され、支援者は年代による特徴・心身の発達を踏まえることが大切である。
- ②男女の違いを理解することで、児童生徒の行動の理解を深めることができる。
- ③学校のみならず、家庭や地域それぞれの立場で、子ども達の変化を把握することが必要である。
- ④表面的な行動に囚われるのではなく、子どものリスク行動の意味を理解しようとするのが支援の第一歩になる。

# 考察

- ⑤教師の日々の関わりや学校の機能そのものが保護因子となっている。
- ⑥学校機能を活かしながら、そこに他機関や様々な職種が関わり、学校をサポートしていくことが重要である。
- ⑦子どものライフステージに応じて、情報を次の場へつなげていく体制が必要である。
- ⑧児童生徒が「居場所」「心の拠り所」があると感じられる、受容され見守られているという感覚を持てることが、社会生活を送る上で大きな心の支えになる。

## 終わりに

子ども時代の心の健康の取り組みは、大人になってからの心の健康や自殺予防につながることを、学校関係者・地域関係者が共通認識を持つことが第一歩である。

児童生徒全体を視野に入れた、心の健康に関する支援（ポピュレーションアプローチ）と、心の問題を抱えた児童生徒への早期の気づきと支援（ハイリスクアプローチ）が求められることが明らかになった。

今後、調査結果の普及・学校と地域の支援体制づくり・若者が暮らしやすい地域づくり・思春期や青年期の相談の充実に取り組んでいきたいと考える。

**\* 若年者の自殺対策に関する調査研究等事業報告書  
当センターホームページに掲載**

<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/seihocnt/>

**\* 若年者自殺対策研修会**

(1) 対象者：学校関係者・行政機関・医療機関・相談機関等の関係職員

(2) 日 時：平成25年2月15日(金) 13時30分～16時

(3) 場 所：TKP仙台カンファレンスセンター

(4) 内 容

ミニシンポジウム

テーマ 「児童生徒のこころと行動に関する調査結果について  
教育現場と地域から考える」

話題提供者 教育庁高校教育課 主幹 高橋賢氏  
登米市健康推進課 技術主幹 及川清美氏

講 話「宮城県における思春期の若者に対する支援について」  
講師 和歌山県精神保健福祉センター 所長 小野善郎氏

**ご静聴ありがとうございました**

